

[31_1] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
31(1)

<https://doi.org/10.15017/1470443>

出版情報 : 図書館情報. 31 (1), pp.1-12, 1995-06-01. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :



図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 31, No. 1 (1995)

目次

• 附属図書館長就任にあたって	1
• デジタル図書館	2
• 新しい図書館に期待する	6
• OPAC検索マニュアルがftpで入手できます	8
• 学術情報センター学術雑誌目次速報データベースへの参加	9
• 中央図書館で「ザンクト・ガレン修道院の文化」展を開催	10
• 九州大学学内開放イベントでOPAC検索体験・館内ツアーを実施	10
• 情報サービス課の事務室を統合しました	10
• 演習室利用の手続が簡単になりました	10

附属図書館長就任にあたって

附属図書館長 小山 勉

4月1日付で、村上幸人前館長の後任として就任しました。利用者から図書館という組織の責任者に立場が代わり、就任して最初は何をどうすればよいか、ほとんど分からず、事務部長をはじめ各課長やその他の館員の方々の懇切丁寧な指導を得ることができ、かろうじてゆっくりではありますが、歩きだし、職責の何たるかを少しずつ実感しはじめたばかりです。

私が最初にやったことは、『九州大学附属図書館要覧』、附属図書館職員配置表、附属図書館商議委員会委員名簿、附属図書館自己点検・評価委員会委員名簿、附属図書館の将来構想に関する検討委員会委員名簿に目を通すことでした。それから、大学図書館関係の報告書や要望書を読みはじめましたが、先端技術分野とはかけ離れた西洋政治思想史と比較政治学を担当している私にとっては、そう簡単に理解できるものではありません。これからは、専門の館員だけでなく、図書・情報に精通した教官と率直に接触しながら勉強していかないと、新キャンパス移転に伴う附属図書館の難題を解決するどころか、ルーティンワークだけでも3年間の任期は勤まりそうもないというのが情けない実感です。

九州大学附属図書館は、中央館、医学分館、六本松分館、並びに学部・研究所等に設置されている図書室の総体です。附属図書館は、大学本来の使命である研究・教育の発展に不可欠の学術情報資料を収集・整理し、研究者と学生に必要な学術



情報の提供サービスを効率的に行うことを目的とする最重要部門です。附属図書館は『図書館情報』を発行してPRを行っていますが、私自身館長に就任する以前は必ずしもよき読者であったとは言えません。今後は、これまで以上に教官と学生の図書館利用率を高めるために、館員の協力を得て、様々の形でPR活動を積極的に行いたいと考えています。

新キャンパス移転構想が打ち出されたことにより、附属図書館の当面する最重要課題は、新キャンパスにおける新しい研究教育体制に最もふさわしい附属図書館の将来構想に関する検討作業です。集中化か分散化かといった従来の二者択一的な発想に固執していますと、過度の集中は中央に溢血、末端に貧血

をもたらす、研究教育の現場の活性化にはつながらず、逆に過度の分散化は組織としての非効率・機能障害をもたらす傾向があるように思われます。したがって、大学図書館は、組織を通じての広範な情報資料の収集・利用の有効性を確保する役割を有しているという点では、私蔵本型資料収集方式とは違うと言えよう。問題は、中央と末端とのネットワークをいかにしてシステム化し、公共利用の効率性を高めるかではなからうか。近年、20世紀の巨大組織の病理を解決するために、ネットワーク的連携による共生的活性化が提言され、実施されつつあります。

ところで、学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会が平成5年12月16日に「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」という報告書を出しています。そのなかには、新キャンパスにおける附属図書館の将来構想を検討する際に大いに参考になる問題提起と基本的な方向づけがなされています。そのうちで特に指摘しておきたいのは、学術研究情報ネットワークを活用した大学図書館機能の充実と大学間協力等の促進です。具体的には、図書館と情報

処理センター等との協力、大学図書館間の連携協力、国際的連携協力、電子図書館的機能の整備充実、等等、ここでもネットワーク的連携の強化・発展が強調されています。

最近、『大学広報』(No.831)に「九州大学の改革の大綱案」が発表されました。新キャンパス計画専門委員会による検討作業の成果が将来計画小委員会と評議会の審議を経て全学的な案として結実する時期もそう遠くはないであろう。附属図書館にとって特に重要なのは、COEに相応しい総合大学のバランスある発展と、各専門分野の独自性とそれを基盤とする横断的・学際的な研究教育の特徴ある発展を支える土台的役割を果たすために、全学的要望をいかにして実現度の高い図書館構想に収斂させるか、であるように思われます。

館長就任にあたり、21世紀にCOEの象徴的重要性を担う附属図書館の将来構想に関する検討という最優先的難題を抱えて重責を果たしたいと存じますが、館員とともに、総長、事務局長をはじめ全学の教職員の御理解と積極的な御支援をお願いします。

デ ィ ジ タ ル 図 書 館

田 畑 孝 一

はじめに

「デジタル図書館」という言葉は、去年頃から使われるようになった比較的新しい言葉で、それまでは「電子図書館」と言われていた。今でも「電子図書館」の方が通りがいいのかも知れない。ただし、図書館資料の電子化といった従来の「電子図書館」と、World Wide Web(以下、WWWと略す)をもととした「デジタル図書館」とは一線を画したものになってきている。

私共は、「デジタル図書館」ワークショップを昨年8月31日に図書館情報大学で開催した。参加者350名。第2回(11月30日)は430名と参加が増え、今急激に「デジタル図書館」への関心が高まっている。なお、今年の3月に第3回のワークショップを計画している。

「デジタル図書館」を説明するため、そのもととなっているWWWを紹介する。WWWは、一言で

言えば、インターネットというネットワークの上にHTMLという方式で記事を書きこれを世界中から見ることができるようにしたものである。

(ここで、OHPで総理大臣官邸のWWWのホームページ及び第2回村山総理の所信表明演説、アメリカのLCのホームページ、WWWで入手した彗星が木星に衝突した時のカラー写真等の紹介があった。編集部)

この様に、自分の所、極端に言えば自分の机の上のワークステーションに記事を入れておくと、世界中から見に来てくれ、逆にまたそこから世界中へ見に行けるというのが基本となっている。

図書館：第三の波

アルビン・トフラーが1980年に「第三の波」という本を出している。第三の波というのは、これからの新しい時代の方向を示す言葉として彼が使っている訳であるが、この第三の波が図書館にも押し寄せ

ており、それがデジタル図書館だというのが私の言いたいことである。

アルビン・トフラーによると、第一の波は農業革命であり、第二の波は産業革命である。第三の波はこれからであるが、これからのについては特に名前はない。

農業革命というのは数千年に渡ってゆるやかに展開されたもので、いつ行われたとは言えないが、この革命により自分で作り自分で食べるという時代になった。この段階では、生産と消費が渾然一体となっており、何でも屋の個性的な能力が尊ばれたと考えられる。

この時代が長く続いた後、第二の波で産業革命になり、それが今も続いている。ここでは生産と消費の分離が行われている。大きい工場で作る、一方でそれを買う人がいる。この時、規格化とか、分業化とか、集中化とか、中央集権化とかが行われてきた。そこには非人間的な原則がある。非人間的な原則とは何かということであるが、生産や流通の過程で様々なことが考えられる。いま世の中に歪みのようなものがあれば、それから来ていると考えられる。

第三の波はこれからであるが、そこでは生産と消費が融合するだろう。人々は非人間的な原則に挑戦しそれを克服していこう、という意味のことを言っている。

これを図書館に当てはめたらどうなるか。私は「第三の波」として「デジタル図書館」を挙げたいと思う。

では、図書館における第一の波とは何か。いろいろなことが言えよう。そもそも図書館というものが出現した時代が第一の波かも知れない。ここでは分類法の考案ということで十進分類法(DDC)を挙げる。この時代はオールラウンドで個性的な司書が尊ばれた。

第二の波はコンピュータ革命がこれに該当すると思う。あるいは印刷術の発明がこれに当たるかも知れない。多少こじつけなのでその辺はお許し願いたい。これを先程のものに当てはめると、著者と読者の分離ということである。MARC(本のカタログ情報の機械化)やオンライン情報検索システムが先程の規格化、分業化、集中化、中央集権化に対応す

る。こういう状況は機械化されており、没人間的な環境とすることができる。

第三の波～デジタル図書館～は著者と読者の一体化の時代と言えるのではないか。ここでは手作りの著述が電子流通により読者へ直接もたらされる。ここでは分散化、分権化されており、人間性あふれる第一の波の時代への回帰とも言えるのではないか。

デジタル図書館はある意味ではひとつの理想的な姿になりうると思っている。リンカーンの言葉を借用すれば、「Library of the people, by the people, for the people」「人々の、人々による、人々のための図書館」、手前勝手にこんなことを言っている訳であるが、このような図書館が実際に存在する時代になってくるのではないか。今までは出版するにはお金がいる、権威がいる(権威がないとなかなか出版できず自費出版とかいう話しになるのである)が、そうではなくなり、誰もが権威や資金にとらわれず自由に出版でき、誰もが原則として無料で自由に選択して読むことができるようになるのではないか。

生産者と消費者が一体になるという、流通関係で何か大変化が起こりうる訳だが、図書館・情報の世界では物流が伴わないので、もっと何かが起こり得る。本当の意味で生産者と消費者の一体化が行われるであろうと考えられる。

一方図書館員の仕事(Librarianshipと言うが)は、これから真価が問われる時代になるであろうと考えられる。今までは出版された物に目を通し、選択し、それを並べておけばよかった訳だが、そこらじゅう様々な分野で、個人的なレベルでも、自由に出版が行われる。これらの出版物はワークステーションから消去してしまえば無くなってしまうので、その中から価値あるもの、後世に伝えるものは何であるかを考え積極的にそれを図書館員が保存しなくてはならない。これは生半可な人にはできない。本当の意味での図書館員の仕事でなければできない。この真の意味でのLibrarianshipがこれから問われてくるだろうと考える。

WWW (World Wide Web)

技術的に言えば、まずハイパーテキストという概念があり、これを地理的に分散してもよいようにし

たものがWWWである。

ハイパーテキストは、文章とか図とか表とかひとかたまりのものを互いに結びつけ、リンクさせておくものである。例えばAという所から、Bという表を見るとか、あるいはCの所へ行ってみる事ができるようにしたものである。

WWWでは、これらの記事が同じコンピュータになく、ネットワークでつながった違う所にあっても構わないようになっている。例えば自分の机の上とアメリカのどこかとの間でリンクを付けることができる。なおリンク先は通常記事全体を指定するが、記事中のある部分を指定することも可能である。

またWWWでは、フルテキストを対象としている。前述の第二の波の段階では、フルテキスト(全文)がコンピュータの中にある訳ではなかった。本の書誌情報(書名、著者名、出版者等)はあるが全文がある訳ではない。学術論文でもアブストラクト(内容梗概)はあるが全文はなかった。

分散ハイパーテキストとフルテキスト検索、この二つが現在重要な鍵となっている。

このWWW(他にWAISというのがある)を利用してネットワーク上の情報共有が行われている。

わが国におけるデジタル図書館の研究

ひとつは、京都大学の長尾真教授を代表とした電子図書館研究会の研究がある。ここでは5年程前から研究をやっているが、京都大学を中心とした何人かの研究者グループと富士通とでAriadne(アリアドネ)を作っている。昨年10月に京都大学で実験公開があった。今現在可能と思われるすべてのものが盛り込んであり、なかなか面白いものであった。

学術情報センターでは電子図書館システムプロジェクトが行われており、来月試行サービスが始まる。Electronic Document Deliveryが実験的に行われる。

つぎに通商産業省の電子図書館プロジェクトがある。「パイロット電子図書館システム事業」と言い、本年度その拠点を慶応義塾大学に構築し、国立国会図書館やその他の省庁の協力のもとに平成7年から11年までの5年間研究開発が行われる。

図書館情報大学では、「デジタル図書館ワークショップ」、「デジタル図書館ネットワーク」というものを始めている。これらの活動は下記のWWW

のアドレスでその内容を見ることができる。

URL <http://www.DL.ulis.ac.jp/>

また、デジタル図書館ネットワークの一環としてメイリングリストを作っており、そのメールネットフォーラムへ行くと、加入者(400人程度)に自分のメッセージがそのまま伝わるので議論等ができる。

DLnet-forum-request@DL.ulis.ac.jp

宛に、helpのみ(左詰めで)の一行のメールを送ると、加入、脱退などの方法を自動返答してくれる。機械が応答するので何時でも出入り自由である。

Ariadne

京都大学と富士通の研究の内容を紹介する。名前はギリシア神話に登場する女性に由来する。WWWを取り入れたものとなっている。けいはんなプラザ、京都大学、国立京都国際会館等をATM(150Mbps)で結んだもので実験をしており、綺麗なカラー画面でできている。

サービスの種類は(1)図書・論文検索:これは蔵書の中からキーワードを入れて検索するもの。(2)世界の図書館:インターネット上のWWW、Gopher等を使ったもの。(3)専門図書館:これには医療診断システムなどが組み込まれている。(4)催し物案内、当時は京都大学附属図書館の展示会「維新展—吉田松陰とその同志」の案内をやっていた。その他大学案内等である。

機能であるが、検索支援として以下のものがある。

書誌情報検索:これは従来のもの。

ハイパーテキスト検索:必要なものをリンクでたどる。他の図書・論文へもリンクでき、引用文献へ直接行ける等。

キーワード検索:フルテキスト検索であり、自分の思いついた言葉を入れるとそれを含んだ文献の一覧が現れ、それが載っているところへ行けるといったもの。

階層構造検索:これは工夫したものひとつで、目次の章節などを利用して複数のキーワードのどちらに重きをおくかを指定し、より自分の求めるものに近いものが検索できる。例えば人口知能を調べたいとき、哲学の見地なのか工学の見地なのかどちらに重きをおくかを指定する。詳しくは長尾先生の著書『電子図書館』(岩波科学ライブラリー)を参照。

質問文検索：これは新聞記事のようなものが集まっていると考え、例えばパソコンについて知りたい時、知りたいとは何なのか、買いたいから値段を知りたいのか、あるいは機能について知りたいのか、そこをいろいろ考えてくれるといったもの。

検索画面は日本語でも英語でも可能。

次に読書支援としては以下のものがある。

複数図書の同時参照：マルチウインドウ

辞書：分からない時すぐ辞書（本格的なもの）を参照できる。

メモ・付箋：メモや付箋をつけることができる。

翻訳：翻訳の質は皆さんが大体想像するようなもの。

朗読：音声で朗読できる。

その他の読書支援機能としては、ジャンプ機能、画面の自由設定、フォントの切り換え、メール機能、利用者環境の保存等がある。

「デジタル図書館」ワークショップ

デジタル図書館はこれからの世界であり、いろんな考え方がある。その意味で、2回にわたって開催されたデジタル図書館ワークショップでの発表の内容、および今年3月開催予定の第3回ワークショップの予定を紹介する。

（この後発表内容の紹介があったが、紙面の都合で省略させていただいた。編集部）

米国の状況

昨年9月に発表されたNSF (the National Science Foundation 米国科学財団) 等からの大学等を中心としたチームのデジタル図書館に関する新技術開発プロジェクトに対する総額2,440万ドルの授与（100を越える応募があり最終的に6つに絞られた）について紹介する。

（この内容についても紙面の都合で省略させていただいた。編集部）

研究組織としての「デジタル図書館ネットワーク」

デジタル図書館の研究はこれからいろんな所で行われる訳だが、情報を作る人、流通過程にいる人、利用する人、皆が一緒になって行う必要がある。セクト主義になっては困る。それがあると研究が遅れてくる。そこで研究の組織のひとつとして「デジタル図書館ネットワーク」（以下、DLNETと略称する）という名前を私共は考えてみた。“情報

資源共有の原則”のもとに、誰もが自由に参加できる研究組織としてのDLNETの形成を提案したい。

“情報資源共有の原則”とは、誰もが自由に自分の著作物を公開するため、それを所蔵できるデジタル図書館を個人または共同で設置し、相互に結ばれたそれらの全てのデジタル図書館が保有するあらゆる著作物の本文を無料を原則に誰もが読むことができる。また誰もが著者を明らかにして上記の著作物の写しを別のデジタル図書館に収集・蓄積し、本文そのものあるいはそれからの抽出情報を非営利目的で第三者に提供できる。同様に上記の著作物から情報検索情報および所在情報を作成し、非営利目的で第三者に提供できる。また、上記の著作物の本文は誰もが言語研究の素材として、文はもちろん語句の単位にまで分解して利用できるものとする。いったん公開した著作物は、それ以後その公開を撤回できない。なお、著作権は本人に属し、他の媒体での発表をさまたげない。著作物には灰色文献 (Grey Literature) と呼ばれるものも含まれる、という内容である。

この様な原則をお互い認めれば自由な研究が進むのではないか。一方では、日本には情報が少なく日本語の研究が困難と言われており、このような原則が認められれば日本でも情報が蓄積され研究が進むのではないか、そういうことも含んでいる。

DLNETでの研究活動としては以下のものが考えられる。

- (1) DLNETのメイリングリストを利用した電子メールによるデジタル図書館に関する自由討論
- (2) デジタル図書館に関する研究・研修・討論および研究成果の出版・蓄積
- (3) DL (DLNETに参加する各々のデジタル図書館をここではDLと略称する) における著作物の登録・管理・提供方式の研究

各DLにおいて、そこで保有する著作物の登録、管理を行い、外からの要求に応じ著作本文の提供を行う。著述内容について著者と読者が議論できるとよい。その結果を著者はその著作物の次の版に反映することができるようになるからである。また、著作物が参照された場合、一定の期間その参照回数を計数し、著者に通知できることが望ましいし、統計情報

はこれを公開してもよいと考える。

- (4) 著作物の著述方式・読書方式の研究開発
- (5) 著作物の収集・蓄積・組織化・二次資料作成の研究

収集DLというものが考えられる。ここでは、関心をもつ領域に関連する著作物を収集し、組織化し、蓄積し、第三者に提供する方法を研究する。各DLで登録された著作物はいつ廃棄されるか分からないので収集DLの役割は重要になる。またここでは、収集物の二次資料や検索情報を作成し提供することもできる。

- (6) 検索方式の研究開発
- (7) 検索情報データベースの研究開発
- (8) 新刊情報とSDIの研究

いずれのDLにおいても新たな著作物が登録されると、そのDLからDLNETの掲示板に新刊情報が掲示される。SDI (Selective Dissemination of Information: 選択的情報提供) の研究も必要になる。

- (9) DL管理ソフトウェアの開発
- (10) DLサーバ・クライアントプログラムの開発
- (11) 紙媒体・携帯型電子媒体への出力方式の研究開発

ネットワークにオンライン (有線・無線) でつながった機器で読書するだけでなく、希望する著作物の本文を紙媒体や携帯型電子媒体 (CD-ROM) に出力し読書したい。

- (12) アクセス権と課金管理方式の研究
- (13) 研究環境の整備と相互協力
- (14) Librarianshipへの期待

数多くの著作物の中から未来にわたる価値を見抜き、後世に伝えるものを見出す収集DLの構築、著作物本文を対象に利用者との電子的協同作業が可能となる参考業務など、未だかつて経験したことがない高度な Librarianship が要求され、また期待が高まる。DLNETで研究としての Librarian を志す者は、自身が関心をもつ特定の領域のエキスパートとして、所属機関は勿論、国の垣根を越えて収集DLや参考業務を行うことができる。各 Librarian の関心はバラエティに富めば富むほどよく、それぞれがその道の一人者になりえる。

- (15) 国際化のための多言語・翻訳の研究
- (16) 国内外の他の団体との研究協力

最後に、著作物を各DLで登録する際、ユニークな識別子を付ける必要が考えられるので、お渡ししている資料にあるようなものを考えている。

(図書館情報大学教授)

(本稿は平成7年1月23日に附属図書館視聴覚ホールにおいて、情報処理学会九州支部、九州大学大型計算機センターおよび九州大学附属図書館の共催で実施された講演会の講演要録である。)

新しい図書館に期待する

吉田昌彦

現在、キャンパス移転にともない、図書館の在り方について議論されている。図書館が、どのように造られ、いかに運営されるかは、新キャンパスにおける九州大学の研究教育の効率、さらには質を規定する重要な問題であることは論を俟たない。しかし、本学が多彩な専攻分野を抱える総合大学なため、図書館に対するイメージやニーズも多岐に分かれているものと考えられるため、多角な視点からの検討と総合化が必要と思われる。ここでは、文系、特に日本史学の立場から自分なりの考えを述べてみたいと思う。

私は本学の文学部国史学研究室の出身である。同研究室や廊下を挟んである書庫には、研究書・史料集・地方史・辞典・学術雑誌などを配架している。学部進学時、その量に驚いたものであるが、卒論執筆時や大学院時代において、質・量の両面で、かなり不足していることに気づかざるを得なかったことを覚えている。特に新刊の文献については、その傾向が大きかったような記憶がある。しかし、それは、なんら怠慢の結果ではなく、非実験の国史学講座の研究費では、教官個人のための研究費をゼロにしても、その年々の専門書の刊行量のごく一部しかカウ

アードできなかったために過ぎない。このため、必要な文献のうち、必要度の高いものは自費購入し、そのほかは、文学部九州文化史研究所・法学部・経済学部や教養部分館の蔵書や国公立図書館のサービスで賄っていた。このとき、残念ながら、中央図書館の蔵書の比重はあまり高くなかったのではないかと気がしている。勿論、私が前に勤務した国立大学や垣間見た私立大学に比べて私の出身研究室の蔵書量はかなり多いものと考えられるが、研究室の蔵書だけでは研究教育体制が組むことができず少なくとも学内の他セクションの図書を動員しないと満足な体制を組めないことは、先に述べた私の体験でも明らかと思われる。多分、文系の研究者・学生の現状も大同小異ではないか、という気がする。

ゆえに、新図書館構想案において、図書の集中管理を前面にうちだすことは、このような現状を踏まえた図書閲覧体制の効率化と評価できよう。また、洪水状態に近いともいえるべき出版状況に対して、同一文献の重複購入を予防し乏しい予算の効果的な運用を図るという効果をもたらすものと評価できよう。

しかし、注意しなければならないのは、このような一元的管理が教官の研究教育活動に対してマイナス要素をもたらさないかという点である。因に、本学において、研究室を舞台とした学問や方法論に関する濃密な伝授を教育の柱のひとつとしている部局は決して少なくはないと思われる。このような在り方は、教官はもとより院生を抱える研究室の大きなメリットであり、このメリットを生かすためにも、基本的文献の研究科、もしくは学部の図書室・研究室（もっとも、研究室自体、どうなるか、わからないが、少なくともティーチングアシスタント・院生・学部生が日常的に接触する場を確保することは、理系はもとより文系においても必要であろう）への配架は不可欠であろう。また、教官の教育研究の便を考えると、個人研究費の自由な執行、図書類の教官研究室の蓄積は当然であると考えられる。

以上のような教官の研究教育活動への配慮が、図書の一元的管理や効率化と相反するものであることは否定できない。これらを両立させる方策として、図書情報の集中管理と基本的文献のデータ・ベース化が考えられよう。個人管理の図書でも、学内の利用に供するとの原則を明確にしておけば、学内で端末操作による検索で所在を確認し一定の手続きを

踏んでの利用は可能になるし重複図書の購入も減少させることができるであろう。また、基本的文献や主要学術雑誌のデータ・ベース化、すなわち、単なる検索だけではなくイメージ・スキャナーなどの処理によるディスク化などを通じて端末操作のみで眼前のディスプレイに読みたい文献のページを画像化しプリントアウトできるシステムを整備すれば、将来的には全国ネットと結ぶことにより遠隔地の文献資料の入手が容易になるであろう。そして、同一図書の重複購入・登録の回避や配架スペースの節約にもなる。

また、事務体制も、かかるデータ・ベース部門を重点に大幅に補強する必要がある。

そして、一館構想をとるか、二館構想をとるかは、このような新システムのための人的・金銭的成本確保の緊要性と二館設置によってもたらされる利便性との比較検討によるのではないかとと思われる。

さらには、このようなデータ・ベース化に関連していえば、このような情報化要請に対して、新たなライブラリアンとしてのソフトの開発研究が不可欠になるものと考えられるが、そのための図書館・情報学のスタッフの充実が必要であろう。そして、かかる過程を通じて、閲覧者に適切な助言と便宜とを提供するという機能の充実とライブラリアン教育の実施による社会への還元を図ってほしいものと望んでいる。

次に文献資料の保存についてであるが、理系と異なり、文系の場合、文献自体が研究対象となる場合もあるので、一層の拡充を望むところ大である。法定スペースの関係もあるので、いくつかの分野を選び、従来、廃棄していた一般雑誌をも含めて重点的に保存しておけば、将来、特色のあるコレクションとして全国的に活用されることもあるのではないだろうか。すなわち、「単なる保存」ではなく部分的には「意図した保存」を行ってほしいのである。

以上のような図書館の在り方は、これから不可避になる公開の進展にとって妨げにはならないものと思われる。

最後に、古文書保存について述べたいと思う。現在、各図書館には古文書が保存されているが、古文書を扱う専門的知識をもった人を配置していないし、多分、将来的にも配置・処遇は困難であろう。保存・閲覧の在り方や施設も、本来、一般の図書とは異

なっている。このため、史料研究センターを別途設置し研究者・アーキビストを配置して全学の古文書や歴史資料を写したマイクロフィルム類を移管、保存・未整理史料の整理を行うとともに主要史料については、上述したようにデータベース化して史料を端末ディスプレイで映像化・プリントアウトを可

能にし、将来的には、このシステムを全国ネットに繋ぎ全国的な共用施設・研究センターとしての機能を持たせたら如何であろうか。また、その際、本学の特性や史料の在り方をふまえたテーマに重点を置くことは勿論である。さらには、アーキビスト養成や社会人教育にも活用できるものと考えられる。

(比較社会文化研究科 助教授)

原稿を募集します

今回、比較社会文化研究科の吉田先生に、「新しい図書館に期待する」と題してキャンパス移転後の新しい図書館に関して執筆していただきましたが、図書館情報編集委員会では「キャンパス移転後の新図書館」に関する原稿を下記のとおり募集します。

記

2,000字程度。原稿締切、平成7年7月20日。問い合わせ、送付先：附属図書館情報サービス課参考調査掛（内線 2454）

OPAC 検索マニュアルが ftp で入手できます

KITEを通してOPAC(利用者用オンライン目録)が利用できますが、上手に使いこなすには検索コマンドに関する知識が必要です。附属図書館では「OPAC検索マニュアル」(参考調査掛でお渡しします。内線2454)を用意していますが、ftp(ファイル転送)でも入手できるようになっていますのでご利用ください。

入 手 手 順

```
% ftp 133.5.129.3          ← 図書館のftpサーバに接続します
Connected to 133.5.129.3.
220 bacchus FTP server (Version wu-2.4(4) Thu Sep 29 19:05:37 JST 1994) ready.
Name (xxx.x.xxx.x:xxx): anonymous ← 誰でも利用できる匿名ログイン名です
331 Guest login ok, send your complete e-mail address as password.
Password: _____ ← あなたのメールアドレスを入力してください
230- Welcome to our Kyushu University Library FTP Server.
```

<省 略>

```
ftp> cd pub          ← ディレクトリをpubに移動します
250 CWD command successful.
ftp> get opac        ← opacという名のファイルを自分のWSやPCに取り込みます
200 PORT command successful.
150 Opening ASCII mode data connection for opac (7304 bytes).
226 Transfer complete.
local: opac remote: opac
7497 bytes received in 0 seconds (7.32 Kbytes/s)
ftp> quit           ← 図書館のftpサーバとの接続をクローズします
221 Goodbye.
%
```

注意 図書館のftpサーバは暫定運用中のため利用時間を月曜～金曜日の9:00～17:00に制限しています。

(情報システム課システム管理掛)

学術情報センター学術雑誌目次速報データベースへの参加

学術情報センターが平成6年度に開始した学術雑誌目次速報データベース形成事業に、本学は下表の紀要類44誌について1994年刊行分から参加することになりました。全学で刊行される百数十タイトルの紀要類の総数から考えると、この参加誌数は非常に少ないという観がありますが、今後、データの入力方法等が技術的に進歩することによって参加誌数も増加すると予想しています。現在このデータベースには、全国で115機関(210組織)が参加し、約800タイトルの雑誌の目次データが蓄積されていますが、この誌数も漸次増加の傾向にあります。

なお、このデータベースはNACSIS-IR上でSOKUHOの呼び出しコマンドによって検索できます。

(情報システム課 第一目録情報掛)

参加部局名	入 力 雑 誌 名
中央図書館	九州大学留学生センター紀要 計算機科学研究報告 健康科学
医学分館	福岡医学雑誌 九州大学医療技術短期大学部紀要 九州神経精神医学 日本手の外科学会雑誌 西日本皮膚科 西日本泌尿器科
六本松分館	独仏文学研究 英語英文学論叢 言語文化論究 言語科学
文学部	哲学年報 史淵 文学研究
教育学部	教育学部紀要、教育学部門 教育学部紀要、教育心理学部門 比較教育文化研究施設紀要
法学部	法政研究 九大法学 政治研究
経済学部	経済学研究 経済論究
理学部	Memoirs of the Faculty of Science, Kyushu University. Series C: Chemistry Memoirs of the Faculty of Science, Kyushu University. Series D: Earth and planetary sciences Kyushu journal of mathematics 九州大学理学部研究報告地球惑星科学
工学部	九州大学工学集報 Memoirs of the Faculty of Engineering, Kyushu University
薬学部	九州薬学会会報
農学部	九州大学農学部学芸雑誌 Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University ESAKIA: Kyushu University publications in entomology BIOTRONICS: environment control and environmental biology 九州大学農学部農場報告 (Bulletin of the Kyushu University Farm) 九州大学農学部農場研究資料 Bulletin of the Institute of Tropical Agriculture, Kyushu University (熱帯農学研究) 九州大学農学部演習林報告 演習林年報 (九州大学農学部附属演習林)
総理工	九州大学大学院総合理工学研究報告
応力研	応用力学研究所所報
機能研	九州大学機能物質科学研究所報告
石炭研	エネルギー史研究
計	44 誌

中央図書館で「ザンクト・ガレン修道院の文化」展を開催

本展は、ザンクト・ガレン修道院文書館長ヴェルナー・フォグラー博士が企画・構成し、1990年以来、欧米各地で開催され好評を博した巡回展の日本版で、平成6年10月から平成7年3月にかけて、東京芸術大学をはじめ全国5会場で開催された。福岡会場は、「ザンクト・ガレン修道院の文化」展組織委員会(委員長:平山郁夫東京芸術大学長)及び九州大学文学部美学・美術史研究室(福岡会場担当者:菊竹淳一九州大学文学部教授)が主催し、九州大学附属図書館中央図書館を会場として平成7年1月18日から1月31日(日曜日を除く)までの期間開催された。期間中の入場者合計は207名。

ザンクト・ガレンのベネディクト会修道院は、スイス東北部に位置し、その起源は8世紀に遡り、9

世紀から11世紀にかけて黄金時代を迎え、学問と芸術の伝統を守り育成することにおいてヨーロッパで最も重要な修道院の一つとなった。とりわけ写本の制作と収蔵で有名である。その後、16世紀から18世紀にかけて第二の繁栄の時代にバロック様式の修道院聖堂と修道院図書館が建造され、現存するこれらの建築群は修道院建築史上の傑作として1983年にユネスコの世界文化財に指定された。

本展は、初期中世およびバロック期に輝かしかつたザンクト・ガレン修道院の文化活動の歴史を、その初めより1805年の修道院活動閉鎖に至るまで、66枚の大型パネルを中心に、写本ファクシミリ、柱頭・象牙彫の石膏複製、建築模型などを加えて通観しようとしたものである。(附属図書館)

九州大学学内開放イベントでOPAC検索体験・館内ツアーを実施

九州大学では、さる平成7年2月18日(土)、九州大学学内開放イベント～科学技術振興における大学の役割～と題し、民間企業等の関係者はもとより一般市民の方々に箱崎キャンパスを開放して種々の講演会・シンポジウムを開催しました。附属図書館でも「館内ツアー」と「OPAC検索体験」を実施しまし

たが、当日は40名を越える熱心な参加者がありました。館内ツアーでは、中央図書館内を職員の案内で見て回り、OPAC検索体験では、館内の端末機でOPACの利用法を説明するとともに、インターネットや公衆回線での接続法についても説明しました。

(情報サービス課)

お知らせ

情報サービス課の事務室を統合しました

中央図書館では従来、閲覧掛(図書の貸出・返却、利用者登録、グループ演習室利用受付、貴重図書利用受付等)事務室は3階、相互利用掛(学外文献複写依頼、相互貸借、他大学図書館利用依頼等)及び参考調査掛(オンライン情報検索、参考調査等)事務室は2階と分かれており、利用者に何かと不便をかけていました。この度、参考調査事務室横に1ス

パン分事務スペースを広げ、そこに閲覧掛が入り業務を行うことになりました。これにより情報サービス課3掛事務室を統合し、相互に連絡を密にしてサービスの向上に努める所存です。なお、そのため参考図書閲覧室内の様態替えを行いましたので御了承ください。

(情報サービス課)

演習室利用の手続が簡単になりました

中央図書館では、演習室の利用申込手続の簡略化と効率的利用を図るため、演習室利用要項を一部改正し、平成7年3月7日から次の通り実施しています。

1. 従来は教官(講師以上)の承認印が必要でし

たが、学生の利用代表者(印鑑要)名での申し込みが可能になりました。

2. 従来は事前に予約が必要でしたが、空室があれば当日の申し込みを受け付けます。

(情報サービス課 閲覧掛)

本学教官・名誉教授著作寄贈図書

＜中央図書館・六本松分館＞

田島 松二 (言語文化部)
「コンピューター・コーパス利用による現代英米語法研究」 田島松二編著
開文社出版 1995

＜中央図書館・経済学部図書室＞

伊東 弘文 (経済学部)
「現代ドイツ地方財政論」増補版 伊東弘文著
文真堂 1995

＜中央図書館＞

安部 淳、岩元 泉 (農学部)
「コメ問題を学ぶ～生産者と消費者の連帯を求めて～」
福岡県自治体問題研究所, 日本科学者会議福岡支部編
安部淳, 岩元泉ほか執筆 自治体研究社 1994

秋吉 勝廣 (言語文化部名誉教授)
「艾青詩集」 秋吉久紀夫訳編
土曜美術社 1995

田島 松二 (言語文化部)
「The syntactic development of the gerund in Middle English」
By Matsuji Tajima Nanun-do, 1985

＜六本松分館＞

甲木 伸一 (工学部)
「初等力学」 甲木伸一著
裳華房 1995

高橋 憲一 (比較社会文化研究科)
「最初のコペルニクス体系擁護論」
R. ホーイカース著 高橋憲一訳
すず書房 1995

＜文学部図書室＞

町田 三郎 (文学部)
「中国思想史論叢」上・下巻
町田三郎教授退官記念論文集刊行会 1995

＜法学部図書室＞

藪野 祐三
「ローカル・イニシアティブ～国境を越える試み～」
藪野祐三著 中央公論社 1995

＜農学部図書室＞

平嶋 義宏 (農学部名誉教授)
「生物学名命名法辞典」 平嶋義宏著
平凡社 1994

江藤 守總 (農学部名誉教授)
「Progress and prospects of Organophosphorus
agrochemicals」
Morifusa Eto, John E. Casida, editor.
九州大学出版会 1995

附属図書館商議委員会委員名簿 (平成7年5月1日現在)

委員長	(法)	教 図 書 館	授 長	小 山 勉	委 員	(薬)	教 授	渡 辺 繁 紀
委員	(文)	教 六 本 松 分 館	授 長	福 田 殖	〃	(工)	〃	尾 崎 龍 夫
〃	(〃)	教	授	迫 野 虔 徳	〃	(〃)	〃	松 井 千 秋
〃	(〃)	〃	〃	谷 隆 一 郎	〃	(農)	〃	森 本 桂
〃	(教)	〃	〃	村 山 正 治	〃	(〃)	〃	小 林 康 平
〃	(〃)	〃	〃	村 田 豊 久	〃	(言語文)	〃	田 島 松 二
〃	(法)	〃	〃	伊 藤 昌 司	〃	(総理工)	〃	山 添 昇
〃	(〃)	〃	〃	石 川 捷 治	〃	(〃)	〃	本 地 弘 之
〃	(経)	〃	〃	近 昭 夫	〃	(生医研)	〃	木 村 元 喜
〃	(〃)	〃	〃	下 山 房 雄	〃	(応研)	〃	蔵 元 英 一
〃	(理)	〃	〃	高 田 健 次 郎	〃	(機研)	〃	田 代 昌 士
〃	(〃)	〃	〃	大 野 素 徳	〃	(健七)	〃	山 田 裕 章
〃	(医)	教 医 学 分 館	授 長	立 石 潤	〃	(比社文)	〃	合 山 究
〃	(〃)	教	授	恒 吉 正 澄	〃	(〃)	〃	吉 岡 斉
〃	(歯)	〃	〃	飯 島 忠 彦	〃	(数理)	〃	鎌 田 正 良
〃	(〃)	〃	〃	古 賀 敏 比 古	〃	(〃)	〃	田 中 俊 一
〃	(薬)	〃	〃	小 栗 一 太				

◆ 人事異動 (平成7年2月～4月)

(中央図書館)

- 4.1 小山 勉 附属図書館長 (任期は平成10年3月31日まで)
- ◇ 山下 谷治 情報サービス課長 (広島大学附属図書館情報サービス課長)
- ◇ 濱崎 修一 情報管理課課長補佐 (情報システム課システム管理掛長)
- ◇ 木下 隆司 情報管理課庶務掛長 (熊本大学庶務部庶務課企画広報係長)
- ◇ 園田 國昭 情報管理課受入掛長 (理学部等図書掛長)
- ◇ 古賀 幸成 情報システム課システム管理掛長 (医学分館閲覧掛長)
- ◇ 柴田 照代 情報管理課庶務掛 (情報管理課会計掛)
- ◇ 宮脇 英俊 情報管理課会計掛 (情報管理課受入掛)
- ◇ 柴田トミ子 情報管理課受入掛 (情報管理課庶務掛)
- ◇ 一木 隆子 情報サービス課相互利用掛 (情報システム課第一目録情報掛)
- ◇ 原田 紀子 情報サービス課参考調査掛 (情報サービス課相互利用掛)
- ◇ 澤井 寛 情報システム課第一目録情報掛 (法学部図書掛)
- ◇ 宮本 愛子 情報システム課第一目録情報掛 (情報管理課受入掛)
- 3.31 村上 幸人 (附属図書館長) 停年退職
- ◇ 安川 榮 (情報管理課課長補佐) 停年退職
- 4.1 松本 連蔵 大阪大学附属図書館情報サービス課長 (情報サービス課長)
- ◇ 木村 勝 工学部総務課人事掛長 (情報管理課庶務掛長)
- ◇ 安永振一郎 鹿屋体育大学教務課図書第二係長 (情報サービス課参考調査掛)
- ◇ 宮本 政美 アイソトープ総合センター事務室主任 (情報管理課会計掛主任)

(医学分館)

- 4.1 山崎 弘人 受入掛長 (情報管理課受入掛長)
- ◇ 吉村 俊亮 目録掛長 (六本松分館閲覧掛長)
- ◇ 伊藤 繁行 閲覧掛長 (目録掛長)
- ◇ 樋口 伸子 受入掛 (経済学部図書掛)
- ◇ 石井 和子 目録掛 (文学部図書掛)
- ◇ 沖 政広 参考調査掛 (筑波大学附属図書館)
- ◇ 穴見 一博 佐賀大学附属図書館運用係長 (参考調査掛)

(六本松分館)

- 4.1 堀之口廣教 閲覧掛長 (佐賀大学附属図書館運用係長)
- ◇ 今林 安雄 受入掛 (目録掛)
- ◇ 井ノ上俊哉 目録掛 (情報システム課第一目録情報掛)

(文学部)

- 4.1 梅津 正子 図書掛 (農学部図書掛)
- ◇ 上田はるみ 図書掛 (歯学部業務課収入掛)

(経済学部)

- 4.1 仲 タカノ 図書掛 (医学分館目録掛)
- ◇ 西島 徹 図書掛 (六本松分館受入掛)

(理学部等)

- 4.1 山田 玄連 図書掛長 (工学部総務課図書掛長)
- ◇ 下川 享子 図書掛 (工学部航空工学科図書室)

(薬学部)

- 4.1 小川 稔 図書室主任 (経済学部図書掛)
- ◇ 渡辺龍之介 宮崎医科大学総務部図書課閲覧参考係長 (図書室主任)

(工学部)

- 4.1 保田 秀人 総務課図書掛長 (医学分館受入掛長)
- ◇ 伊藤美智子 工学部航空工学科図書室 (理学部等図書掛)

(農学部)

- 4.1 松田 尚代 図書掛 (医学分館受入掛)
- ◇ 藤本 和美 図書掛 (工学部応用理学教室)
- ◇ 松本 孝文 九州工業大学附属図書館情報工学部分館図書係長 (図書掛)

◆ 日 録 (平成7年2月～4月)

- 2.3 図書館電算機導入説明会
- 7 CD-ROMネットワークセミナー
- ◇ 全学図書系掛長会議
- ◇ 全学図書系掛長研修会
- 18 九州大学学内開放イベント (OPAC検索・館内ツアー)
- 22 韓国全南大学校図書館長ほか来館
- 3.2 韓国教育行政官代表团6名来館
- ◇ 地域講習会担当者連絡会議 (学術情報センター)
- 7 分館長会議
- ◇ 附属図書館商議委員会
- ◇ 「目録情報の基準運用細則」作成検討部会 (学術情報センター) 7～8
- 8 講演会 (北海道大学附属図書館 宇野図書館専門員)
- 13 研修講演会
- 16 全学図書系掛長会議
- ◇ 図書館業務電算機システム推進委員会
- 22 附属図書館電子計算機システム仕様策定委員会

- 3.22 附属図書館将来構想検討WGのサブWGの正副責任者等会議
- ◇ 京都大学東南アジア研究センター 外国人研究員ほか1名来館
- ◇ 福岡市民図書館協議会 (福岡市民図書館)
- 28 東京外国語大学附属図書館長ほか1名来館
- 4.7 附属図書館将来構想検討WGのサブWGの正副責任者等会議
- 17 雑誌目録データ移行準備作業説明会
- 18 附属図書館自己点検・評価ワーキンググループ会議
- ◇ 全学図書系掛長会議
- ◇ 全学図書系掛長研修会
- 19 附属図書館電子計算機システム仕様策定委員会
- 20 第25回九州地区国立大学図書館協議会 (北九州市)
- 21 第46回九州地区大学図書館協議会 (北九州市)
- 24 図書館情報編集委員会

編集委員 主査・山下 谷治 委員・末次 美知夫, 木下 隆司, 山田 律子, 小川 稔, 林田 和政, 永井 謙, 舟越 俊允, 出島 照義

九州大学附属図書館報「図書館情報」

Vol. 31, No. 1 (通巻175号)

1995年6月1日・発行人 辻 英雄

発行所 九州大学附属図書館・〒8112-811 福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話 641-1101 内線2454